

主 題：神の子羊

聖書箇所：ヨハネの福音書 1章29－34節

今朝はタイトルにもあるように、特に「神の子羊」について29－34節を中心に考えてみたいと思います。まずはいつものように神様のことばを一度お読みしますので、それぞれよく耳を傾けてみてください。

ヨハネ1：29－34節

「:29 その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。:30 私が『私のあとから来る人がある。その方は私にまさる方である。私より先におられたからだ』と言ったのは、この方のことです。:31 私もこの方を知りませんでした。しかし、この方がイスラエルに明らかにされるために、私は来て、水でバプテスマを授けているのです。」:32 またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。:33 私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『御霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』:34 私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。』」

さて、翌日の話に入っていく前に、少し前日の出来事を思い出しておきましょう。先週私たちは19－28節を通して、証し人であるバプテスマのヨハネのすばらしい模範を学びました。もっと言うと、彼と宗教家たちが遣わした調査隊とのやりとりから、キリストをあかしする者に必要な二つの態度を見ましたが、覚えていますか？一つ目の態度として見たのは、まず、キリストに人々の目を向けることでした。当時、荒野で働きをしていたヨハネのもとには、日々文字通り数多くの人たちが集まってきました。マラキから続いていた400年もの沈黙を破って現れた彼は、まさに当時の人たちにとって興味や関心の中心にあった人物だったのです。しかしそれでもヨハネは、どんな時も自分自身ではなく、キリストに人々の焦点が向けさせようとしていた人物でした。自分のもとに遣わされて来た調査隊の尋問を受けている時も、それは、いっさい変わることはありませんでした。ある日、自分に疑念や嫌悪感を抱いている者たちによって彼は尋ねられたのです。「あなたはキリストですか？」「あなたはエリヤですか？」「あなたはあの預言者ですか？」と。しかしそのすべてに対して彼は否定して、「ただ私は、預言者イザヤが言ったように『主の道をまっすぐにせよ。』と荒野で叫んでいる者の声なのだ。」と答えました。彼は自分が何者でもないこと、むしろ「ことば」である偉大なキリストを人々に伝えるだけの存在なのだとわかっていたのです。だからこそ、「声」である自分が自分に焦点を当てていたり、人から受け入れられたいとしたり、人から称賛や感謝をされることを求めようとはしませんでした。「声」であった彼は、「声」自体が目立とうとは決してしなかったのです。ただ彼は「声」として、「ことば」である方に人々の目を向けようとしていました。それがキリストの証し人に欠かすことのできない一つ目の態度だったのです。

また二つ目の態度として見たのは、キリストの偉大さを覚えることでした。もう何度も言うことになりましたが、皆さん、忘れてはいけません。このバプテスマのヨハネ自身も、確かにさまざまなことを誇りとすることのできる偉大な人物ではありませんでした。イエス様も後に彼のことを「…女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。…」(マタイ11：11)と述べられたのです。しかしそんな彼が、キリストを覚えてはっきりと口にしていました。1：26－27にこのように書いていましたね。「:26 …「私は水でバプテスマを授けているが、あなたがたの中に、あなたがたの知らな

い方が立っておられます。:27 その方は私のあとから来られる方で、私はその方のくつのひもを解く値うちもありません。」と。古代社会においてだれかの「くつのひもを解く」という行為は、最も卑しい身分の低い奴隷に与えられている最低の仕事でした。ヨハネはそんな最低の奴隷がなす仕事ですら、自分には全く値しないものだと思っていたのです。あまりにも偉大なキリストの姿を覚えていたからこそ、そのキリストの奴隷となることすら自分には値しない特権なのだと考えていたのです。彼にとってキリストこそすべてでした。バプテスマのヨハネは証し人として、偉大なキリストをいつも覚えて、その前にへりくだり、そのキリストを人々の前であかしできることを心から感謝していたのです。これが前日の出来事でした。バプテスマのヨハネはただひたすら自分にではなく、キリストに焦点を向けさせようとしていたのです。

そのヨハネが29節、翌日続けて、彼があかししようとしていた、彼が愛していたその主の姿を人々の前で伝えようとしていくわけです。それが、これから私たちが見ていく29-34節のひとつかたまりです。自分のほうにやって来られるイエス・キリストを見た時に、その姿を覚えた彼は、特にこの箇所ですら具体的に二つのイエス様の姿を描いていました。「神の小羊」と「神の子」という二つの姿を通して明らかにしようとしていました。きょうは特に一つ目の内容に関してほとんどすべての時間を使うことになると思いますが、どちらのこともみことばから考えてみましょう。この時間を通して、まずは主の偉大さ、神の小羊であるイエス・キリストが払ってくださったその犠牲のすばらしさを改めてみことばから一緒に覚えましょう。

1. 神の小羊 29-31節

では、さっそく一つ目の姿から考えてみましょう。やって来られたイエス・キリストはいったいどんなお方だったのか、一つ目の姿は「神の小羊」でした。もう一度みことばを見てください。29節にこう記されています。「その翌日、ヨハネは自分のほうにイエスが来られるのを見て言った。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」」「見よ、」とヨハネは最初に口にしていました。この「見よ」ということばですが、これは強い強調を表わすもので、「何かに対して注意を払う」とか「注目する」「目を留める」といった意味が含まれています。言い換えれば、チラッと横目で見るものではありません。片手間に目を向けるのでもありません。重要な事柄を決して見逃すことがないように、それにしっかりと目を留めることを言うのです。これと同じことばは、同じヨハネ19:14-15でもこのように使われています。「:14 その日は過越の備え日で、時は第六時ごろであった。ピラトはユダヤ人たちに言った。「さあ（見よ）、あなたがたの王です」:15 彼らは激しく叫んだ。「除け。除け。十字架につける。」…」容易に想像できません？ピラトが「さあ（見よ）、」とそう宣言した時、そこにいたユダヤ人たちの目は一斉にイエス様に注がれていたことでしょう。ひどい憎しみを抱いていた彼らの思いや関心は、イエス様ただ一点にのみ向けられていたでしょう。これと同じようにヨハネは、自分のほうにイエス様がやって来られるのを見た時、人々に向かってはっきりと言うわけです。「この方を見なさい。」と。「私でもほかのものでもなく、ただこの方に心を留めなさい」と。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊。」と。このことばを聞いて、中には興味深いと思った人もあるかもしれません。というのも、ここでヨハネはほかのかたちでイエス様のことを表現することもできました。「見よ、この方こそ約束の救世主、メシヤだ」と言うこともできましたし、「見よ、この方こそ世界の創造主、すべての主権者、まことの王だ。」と言うこともできたでしょう。どれをとっても間違いではない、そのとおりの事実でした。でもヨハネはそうは言わなかったのです。イエス様の最高の証し人の口から真っ先にここで出てきたものは、「神の小羊」だったのです。そしてこの姿こそ、当時の人たちだけではなく、今の私たちもしっかりと目を留めなければいけない姿でした。「神の小羊」とは、いったいどういうことでしょうか。きょうは時間をとって、やって来られたイエス様が「神の小羊」であるというのがどういうことなのかを、改めて一緒に考えてみましょう。

そのことをより深く考えるにあたって、聖書の一番初めに戻って、最初の人間アダムとエバを造られた神様は、一つの命令とそれに伴う結果というものを彼らに伝えていました。そのことが創世記2：15-17にこんなふうに言われていました。「:15 神である【主】は人を取り、エデンの園に置き、そこを耕させ、またそこを守らせた。:16 神である【主】は人に命じて仰せられた。「あなたは、園のどの木からでも思いのまま食べてよい。:17 しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」と。あまりにも明白に言われていました。「善悪の知識の木からは取って食べてはいけません」そして、それを食べるとき、何て言われていました？たぶん死ぬとか2分の1の確率で死ぬとかではなく、「あなたは必ず死ぬ。」と約束されていたのです。そんなアダムとエバはある日、もうよくご存じのとおり、神様に逆らいました。神様のことばをみずから無視して、その実を取って食べたのです。罪を犯した彼らは、恥や罪悪感を覚えて、神様の目から逃れようとして木の間に隠れます。本来ならいつも神様との交わりを楽しむことができたにもかかわらず、罪は神様の大きな怒りをもたらすことになりました。罪は神様と人との間にあった親しい関係を壊し、結果、人は神様から遠く遠く引き離されることにもなりました。間違いなく罪は非常に大きな問題を実際にもたらすことになったのです。

でも、この創世記を読んでいて不思議に思ったことはありません？4章まで読み進めていくと4：1はこんなことばで始まるのです。「人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、【主】によってひとりの男子を得た」と言った。」皆さん、神様の約束は何でした？善悪の知識の木からとって食べれば、必ず死ぬということでした。でもこの時点でアダムとエバまだ死んでいませんでした。いや、それどころか、エバは主によって新たに男の子まで産んでいたのです。いったい神様の約束はどこに行ってしまったのでしょうか？神様は彼らの罪をまるでなかったかのように扱い、ご自身のことばを真っ向から否定されたのでしょうか？もちろんそうではありませんでした。あわれみ深い神様は、罪人には到底できないことを成されたのです。いったい何だったか見てください。4章の直前の3章の終わりにこのように記されています。創世記3：21「神である【主】は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」と。注目してほしいのは、アダムとエバがそれを求めたからではありません。彼らはいちじくの葉っぱで自分たちをなんとか覆い隠そうとしました。しかし、神である主ご自身が、彼らのために皮の衣を与えられたのです。本来なら罪によって必ず死ぬべき彼らのために、主が代わりに動物を殺し、それで作った衣で彼らの罪を覆い隠されました。こうしてこの世で一番初めの身代わりの犠牲が、この世で一番初めのいけにえがなされました。罪人は、ただ流されたその血にあって罪を赦され、神様の前に生きることが可能だったわけです。

でもこれはアダムとエバだけの話ではありません。もう少し聖書を読み進めて、今度は創世記22章、ここには私たちもよく知っている父アブラハムと息子イサクにあった出来事が記されています。改めて思い出してください。この場面、アブラハムは大きな試練に直面するのです。彼は神様から一つの命令が与えられていました。創世記22：1-2にこのように書いています。「:1 これらの出来事後、神はアブラハムを試練に会わせられた。神は彼に、「アブラハムよ」と呼びかけられると、彼は、「はい。ここにおります」と答えた。:2 神は仰せられた。「あなたの子、あなたの愛しているひとり子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そしてわたしがあなたに示す一つの山の上で、全焼のいけにえとしてイサクをわたしにささげなさい。」と。間違いなくこの命令を受けた時、アブラハムは驚きや悲しみ、混乱といったさまざまな感情を心に抱いていたでしょう。すでにご存じの方もあるかと思いますが、この当時、全焼のいけにえをささげるというのは、単にいけにえに火をつけるだけではありません。そのからだをバラバラにするという工程をも含むものでした。当然そのことをよくわかっていたアブラハムは、愛する息子を自分の手で殺さなければならないということに、ひどい悲しみや痛みを覚えていたでしょう。でもそれだけではありません。彼は悲しみ以上に大きな混乱や疑問も抱いていたでしょう。と言うのも、アブ

ラハムはほかのだれでもない神様からある約束を与えられていました。どんな約束だったか？「…イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれる…」（創世記21：12）、という約束を受けていたのです。神様ご自身が彼の子孫を増し加えるということは何度も何度も約束されていました。だからこそイサクを全焼のいけにえとしてささげることは、人間的に考えれば信じがたい、受け入れられないものでした。では、神様からの命令を受けたアブラハムはどうしていたのか？彼は素直にそのことばに従いました。神様の約束に信頼していた彼は、自分の感情や考えに従おうとせず、愛する子を進んで神様にささげようとしたのです。山に向かって歩みを進めていくアブラハムとイサクの様子が22：6－8にこのように描かれていました。「：6 アブラハムは全焼のいけにえのためのたきぎを取り、それをその子イサクに負わせ、火と刀とを自分の手に取り、ふたりはいっしょに進んで行った。：7 イサクは父アブラハムに話しかけて言った。「お父さん。」すると彼は、「何だ。イサク」と答えた。イサクは尋ねた。「火とたきぎはありますが、全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」：8 アブラハムは答えた。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」こうしてふたりはいっしょに歩き続けた。」「全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」と素朴な質問を息子から投げかけられた時、父は間違いなく心を痛めたでしょう。しかし、それでもアブラハムは、神様が変わらず信頼し続けていました。そして彼ははっきりとこう答えたのです。「イサク。神ご自身が全焼のいけにえの羊を備えてくださるのだ。」と。神様が告げられた場所に到着したあと、アブラハムは祭壇を築き、その上にたきぎを並べ、イサクを縛って寝かせました。言われていたとおりに自分の息子を全焼のいけにえとしてささげようと彼は手を伸ばし、刀を取ってまさにほふろうとしたのです。しかしその時、主の使いが彼を止めました。11－14節にこう記されています。「：11 そのとき、【主】の使いが天から彼を呼び、「アブラハム。アブラハム」と仰せられた。彼は答えた。「はい。ここにおります。」：12 御使いは仰せられた。「あなたの手を、その子に下してはならない。その子に何もしてはならない。今、わたしは、あなたが神を恐れることがよくわかった。あなたは、自分の子、自分のひとり子さえ惜しまないでわたしにささげた。」：13 アブラハムが目を上げて見ると、見よ、角をやぶにひっかけている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行って、その雄羊を取り、それを自分の子の代わりに、全焼のいけにえとしてささげた。：14 そうしてアブラハムは、その場所を、アドナイ・イルエと名づけた。今日でも、「【主】の山の上には備えがある」と言い伝えられている。」これも皆さん同じです。アブラハムがそれを求めたからではありません。神様ご自身がイサクの身代わりとなる犠牲を、イサクの身代わりとなるいけにえを与えてくださいました。ひとりの子の代わりに罪のない雄羊が殺されたからこそ、その子は死を免れることができました。同じです。罪人はただ代わりに流された血にあって、神様の前に生きることが可能だったのです。

でもこれで終わりでもありません。もう少し聖書を進めてみて、今度は出エジプト記12章を見てみます。覚えていますか？神様はこの時、エジプトに奴隷として捕らわれひどく苦しめられていたご自分の民を助け出そうとして、十の災いをもたらしていました。そしてその最後となる十番目の災いの内容がこの章に記されているのです。いったいどのようなものだったのか？神様はモーセとアロンに向かって、まずこのように語っておられます。12：3－7「：3 イスラエルの全会衆に告げて言え。この月の十日に、おのおのその父祖の家ごとに、羊一頭を、すなわち、家族ごとに羊一頭を用意しなさい。：4 もし家族が羊一頭の分より少ないなら、その人はその家のすぐ隣の人と、人数に応じて一頭を取り、めいめいが食べる分量に応じて、その羊を分けなければならない。：5 あなたがたの羊は傷のない一歳の雄でなければならない。それを子羊かやぎのうちから取らなければならない。：6 あなたがたはこの月の十四日までそれをよく見守る。そしてイスラエルの民の全集会が集まって、夕暮れにそれをほふり、：7 その血を取り、羊を食べる家々の二本の門柱と、かもいに、それをつける。」と。ちょっと想像してみてください。モーセは当時、約200万人いたとされるイスラエルの民に向かって、主からの教えを伝えていました。全く生易しい知らせではありません。おのおのが傷のない子羊またはやぎを用意してそれをほふり、その血を自分の家の門柱とかもいに塗るよう

にと求めておられたのです。言い換えれば数百万もの生き物の血が流されるということが言われていたのです。残酷ではないかと思うかもしれません。そもそもどうしてこんなことが求められたのでしょうか？その答えが続く12節からはっきりと述べられていました。12-13節「:12 その夜、わたしはエジプトの地を巡り、人をはじめ、家畜に至るまで、エジプトの地のすべての初子を打ち、また、エジプトのすべての神々にさばきを下そう。わたしは【主】である。:13 あなたがたのいる家々の血は、あなたがたのためにしるしとなる。わたしはその血を見て、あなたがたの所を通り越そう。わたしがエジプトの地を打つとき、あなたがたには滅びのわざわいは起こらない。」いったいなぜイスラエルの民は、羊をほふってその血を家の門柱とかもいに塗る必要があったのでしょうか？それは、すべての初子を打つという神様のさばきから逃れる唯一の方法が、流された血によるものだからでした。神様のさばきを、神様からの罰を逃れる唯一の方法は“血”でした。傷のない子羊の犠牲のゆえに、その血が塗られているのを見た神様はそこには滅びをもたさず、その家を通り過ぎられました。主は通り過ぎられました。この主の過ぎ越しの経験をしたイスラエルの民たちは、この事実を何世代にもわたって毎年祝い続けてきたのです。本来なら神様のさばきはすべての者に下ってしかるべきでした。しかし、その神様のさばきを逃れる唯一のものがありました。それが、いけにえとしてささげられたものの「血」でした。イスラエルの民には、自分たちでできたことは何もありません。神様ご自身が救いの道を与えられました。罪人はただ流された血にあって罪を赦され、神様の前に生きることが可能だったのです。

こうしてイエス様が来られるまでの間、イスラエルの歴史は、まさに「血」と「いけにえ」の歴史でした。罪をひどく忌み嫌っておられるその聖なる神様の前に、罪を赦され、受け入れられるそのためには、身代わりの犠牲が、いけにえが絶えず必要でした。ゆえに民は自分たちの罪の贖いのために、朝に一匹、夕方に一匹子羊をささげ続けていたのです。ずっとずっといけにえをささげ続けていました。でも残念ながら、その動物のいけにえも完全に罪を取り除くことのできない不完全なものでした。ヘブル10:4にこう書いています。「雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。」聖なる神様の前に立ちたいと望んでも、人に罪がある以上、いけにえなしには立つことができませんでした。ささげものには終わりがなかったのです。だから人々はずっとずっと待ち望んでいました。自分たちの罪を一度で完全に取り除いてくれる、身代わりとなってくれる、その羊をです。そして皆さん、やって来られたイエス・キリストは、いっただれでした？この方こそ「神の小羊」だったのです。この方こそ、罪に燃え上がる神様の正しい御怒りを満足させることのできる、なだめることのできる、罪を完全に取り除くことのできる、傷のない最後で最高の小羊でした。Iコリント5:7にもこう書いています。「…私たちの過越の小羊キリストが、すでにほふられたからです。」Iペテロ1:18-19にもこのように書いています。「:18 ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、:19 傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。」と。

ちょっと立ち止まってこの凄さを考えてみてください。私たちが見てきたように、かつてアブラハムがイサクを祭壇に寝かせて、全焼のいけにえとしてささげようとしたその山。この山は、後にソロモンがエルサレムの神殿を建てることになる“モリヤ山”でした。そしてそれはつまり、後にイエス・キリストが十字架につけられるのと同じ場所、同じ山になるわけです。イエス様が来られる2000年ほど前、アブラハムはイサクを連れてその山に登りました。そしてその場において、イサクの場合は、神様が言われていたとおりにアブラハムが全焼のいけにえとしてその息子を神様にささげようとし、まさに殺そうとしたその手を神様が止められました。でもそれから約2000年経って、イエス様が十字架を持ってその山に登った時、神様ご自身がその御子を砕かれました。同じ山において、イエス様は私たちの罪を代わりに背負って私たちのために刺し通されたわけです。イサクは聞いていました。「全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか。」アブラハムは答えました。「神ご自身がそれを備えてくださる。」と。その最高の答えを、神様ご自身が私たちに与えてくださいました。「見よ、世の罪を取り除く

神の小羊」と。イエス・キリストこそ、私たちの罪の身代わりとなるために来てくださった尊い羊でした。そして、皆さん同じです。私たちがそれを求めたからではありません。むしろ、罪を愛し、神様の敵として歩んでいた私たちはみなただひたすらに神様を憎み、神様から遠くかけ離れていました。私たちは羊のようにさまよって自分勝手な道を歩んでいたのです。本来ならそんな私たちには神様のさばきだけがふさわしいものでした。しかしそんな私たちにさえ愛を示してくださった神様は、私たちが最も必要としていたものを与えてくださったのです。私たちの身代わりとなることのできる、その神の羊であるイエス・キリストを与えてくださったのです。私たちには到底できないことを神様が成してくださいました。神の羊であるこの方が、本来私たちが受けるべき罪の罰を代わりに十字架で受けてくださって、そしてこの方が流した血によって、私たちは罪の赦しを、救いを受けているのです。ほかのどんないけにえにもできなかったことを、イエス様は確かに成し遂げられました。私たちはこの方の払ってくださった犠牲のゆえに、今この方を信じる信仰によって生かされているのです。ヨハネはこのすばらしい「神の小羊」を「見よ」と言っていました。

果たして私たちはこの方にどんな時も心を留めているでしょうか？何をする時もこの方の偉大な姿に目を留めようとしているでしょうか？私たちの身代わりとなってくくださったこの方に、私たちの思いや考えはいつもこの方に向いているでしょうか？それとも私たちはほかのものに心が囚われて、イエス様を覚えるときもいつも片手間で、どれほど尊い犠牲を払ってくださったのかを忘れてしまっていないでしょうか？皆さん、この主を「見なさい」と。

でも同時にすばらしいことがあります。私たちは御子を約束どおりに与えてくださったその神様に信頼をしながら歩いていくことができる、ということです。神様は、与えることのできるお方でした。その方に私たちは心から感謝をもって歩いていくことができます。覚えていますか？パウロはこんなことばを残していました。ローマ8：31-32にこう書いています。「:31 では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。:32 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあります。」と。感謝なのは、これは私たちにとっても同じ確信だということです。神様はご自分の尊い御子を、ご自身のみこころでもって私たちの身代わりとなるために送ってくださいました。この方は約束を守られるお方でした。この方は与えることのできるお方でした。そして、そんなお方に私たちはどんな時も身をゆだねて歩むことができるということです。その喜びをパウロはもちろん知っていました。これまで生きていた信仰者たちもみな知っていました。かつて19世紀のイギリスで活躍していた宣教師のひとり、ジョージ・ミュラーもこんなことばを残しています。「私は非常に多くの試練をくぐり抜けてきましたが、その中には並大抵のものでないものもありました。それでも私は神にあって喜んでいました。1838年から1848年までの約10年間、私は困難に次ぐ困難を経験しました。しかし、いつも神の助けがあり、全てが父なる神から来ていることを知っていたからこそ、最も辛い日であろうといつも喜ぶことができました。試練や苦難はあなたにも降りかかるかもしれません。重い試練、深い苦悩さえ降りかかるかもしれません。しかし、もしあなたが「これは私の父、私の愛する父からのもの。私のために御子を惜しまずに与えてくださった方からのもの。全てを益としてくださる方からのもの。御子を惜しみなく与えてくださった方が、私に全てのものを惜しみなく与えてくださる。だから、この試練さえ私にとって良いもの。そうでなければ、私に試練が降りかかるのを神が許されないはずだ」と口にすることができるなら、そういった試練を乗り越えることができます。たとえ試練の真っ只中にあっても、冷静さや平安、そして聖なる天上の喜びを持つことができます。このようにして、私たちは試練に立ち向かうことができるのです。」と。やって来られたイエス・キリスト、この方は「神の小羊」でした。「神の小羊」が私たちのために与えられたのです。ヨハネはそのすばらしさを表現していました。私たちもその方のうちにあって喜ぶことができるのです。

2. 神の子 32-34節

そして最後に簡潔にもう一つ、やって来られたイエス・キリストの姿も見てみましょう。二つ目の姿は、「神の子」でした。32-34節にこんなふうに記されています。「:32 またヨハネは証言して言った。「御霊が鳩のように天から下って、この方の上にとどまられるのを私は見ました。:33 私もこの方を知りませんでした。しかし、水でバプテスマを授けさせるために私を遣わされた方が、私に言われました。『御霊がある方の上を下って、その上にとどまられるのがあなたに見えたなら、その方こそ、聖霊によってバプテスマを授ける方である。』:34 私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」と。ヨハネはここで「私もこの方を知りませんでした。」と口にしました。でもこれは、彼がイエス様について全く何も知らなかったという話をしていてのではありません。むしろ思い出してください。バプテスマのヨハネとイエス様は、いとこの関係にありました。母親のエリサベツとマリヤも子どもの誕生のときだけ挨拶をして、それ以降いっさい何のやり取りもしなかったということはたぶんなかったでしょう。だからこそ幼いころから色々な場面で彼らはともに時間を過ごし、少なくともいろんなことを知識としては知っていたのです。でもそんなヨハネもすべてを知っていたわけではありませんでした。イエス様が約束されていた救世主であるということの意味も、この方が「神の小羊」「神の子」であるという意味も、ヨハネはすべて完全に把握していたわけではなかったのです。それらのことはまだ隠されていました。でもその事実が彼の目の前に明らかにされました。特にどんな時にか？イエス様がバプテスマを受けたその時、言われていたとおりに彼はイエス様の上に霊が下ることを目撃したのです。そしてそれを通して、ヨハネは自分の前におられるのが、まことの「神の子」であるということを知ったわけです。その事実を知った彼は、何をしたか？「私はそれを見たのです。それで、この方が神の子であると証言しているのです。」と。イエス様が「神の子」であるということをヨハネは証言していました。そして覚えていますか？このヨハネの福音書が記されていた最大の目的がこう書いてありました。ヨハネ20:31「しかし、これらのことが書かれたのは、イエスが神の子キリストであることを、あなたがたが信じるため、また、あなたがたが信じて、イエスの御名によっていのちを得るためである。」と。ヨハネの福音書は最初から最後までこの目的のためでした。「イエスが神の子である」と。そして「この方を心から信じ、イエスの御名によって永遠のいのちを得るため」でした。「神の子」「神の小羊」であるそのイエス様のうちにこそ、私たちに必要な罪の赦しが、救いがあるというわけです。それが、ヨハネがこの福音書を通して教え続けようとしていたメッセージでした。

だからこそまだこのイエスを、キリストを知らないと言われる方がいるなら、どうかきょうこの方を信じ受け入れてください。私やあなたの罪のために、イエス様は身代わりとなるために来てくださった「神の小羊」でした。この方の犠牲を、この方のすばらしい愛をどうかきょう知って帰ってください。

そしてこのイエス様を知っているとされる兄弟姉妹の皆さん、私たちはいつも喜ぶことのできる理由を持っています。いつも賛美をささげることのできる理由を持っています。そして私たちはいつの日かこの賛美に参加する時が来るという喜びを持っています。ぜひ最後に黙示録を開いていただいて、5:11-14までこのように記されています。これが私たちの賛美です。「:11 また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。:12 彼らは大声で言った。「ほふられた子羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」:13 また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」:14 また、四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝んだ。」と。「ほふられた小羊」こそ、すべての栄光を受ける方だと。そのことを心に留めて、今週もともに歩いていきましょう。